

文科系學會連合加盟學協會の動向

日本印度學佛教學會報告

I 昭和三十九年度報告

日本印度學佛教學會は、わが國のインド學・佛教學の研究者をもつて組織され、現在會員數一、一六〇名を數える。そのほかに佛教關係の大學が團體で加入しており、約四二校を數える。會員は毎年五〇名前後づつ増加しているが、佛教の研究者の總數から見て、今後會員の増加がづくものと思われる。

本學會の姉妹學會に日本佛教學會がある。

この學會は加盟校單位で運営されており、本學會が個人單位で構成されているのと、組織が異なるが、目的がほぼ同じであり、會員や役員にも共通している人が多いので、相互に密接な連絡をとつて學會を運営している。學術大會なども本學會は、おおむね春に大會を開催し、日本佛教學會は秋に大會を開いている。なお隣接學會に日本宗教學會があり、協

力して研究活動をすすめている。

海外の學界との連絡については、本學會の學會誌には、會員の歐文の研究發表も載せており、さらに全論文の題目を英譯してのせて、外國の研究者の便に供している。そして海外の大學・研究所、および個人の學者、あわせて約三〇〇個所に學會誌を寄贈し、あるいは雜誌の交換を行なっている。これは一九五一年に『印度學佛教學研究』が創刊されてから、繼續して行なっており日本の印度學佛教學の研究を海外に紹介するのに大きな寄與をなしている。すでに一〇年餘を経過して海外での認識も一段と深まっている。最近では歐米から佛教研究のために日本の大學に留學する研究者もふえており、また學者の見學や交流のために、わが國を訪問する人も多い。また交換のために寄贈される外國の雜誌も多く、歐米の研究状況はもとより、インドやセイロン、

ビルマ、タイ等からも雜誌の寄贈があり、南方アジア諸國の研究状況を知る手掛りともなっている。

最近の海外學界との交流としては、昭和三十九年一月（四日より一〇日までの六日間）にニュー・デリーに開催せられた第二六回國際東洋學者會議（The XXVth International Congress of Orientalists）がある。この會議は一八七三年に第一回をバリーに開いたが、今回はその第二六回にあたり、參加國一九、約一、二〇〇名の學者が參加し、研究發表が行なわれた。日本からは榎一雄教授（東大）をはじめ多くの學者が參加したが、佛教學印度學關係では、本會理事の福井康順（早大）、相葉伸（群馬大）の兩氏をはじめ、木村秀雄（龍大）、佐々木現順（大谷大）、中村瑞隆（立正大）、宇治谷祐顯（同朋大）、田村晃祐（東大）等の諸氏が參加し、研究發表をされた。さらに昭和三十九年七月にハワイ大學において開催された第四回東西哲學者會議（The IVth East West Philosophers' Conference）には、東西兩洋から三八名のパネルメンバー（Panel Members）を中心に多くの學者が集つて研究發表や討論が行なわれた。印度學佛教學關係では、鈴木大拙、宮本正尊、中村

元（東大）、堀一郎（東北大）、上田義文（名大）、早島鏡正（東大）、三枝充憲（國學院大）の諸氏が参加せられた。なお昭和四〇年には、第一一回國際宗教史會議（The Xlth International Congress for the History of Religions）がクレアモントにおいて開催される豫定であるが、その際には本學會關係の學者の参加が期待されている。

本學會では毎年一回學術大會を開催し、會員の研究成果を發表し、研究の連絡と親睦をはかっている。昭和三八年には日本大學において第一四回學術大會を開催し、研究發表者は約一八〇名、三九年度は大谷大學において第一五回學術大會を開催し、發表者は約二一〇名であった。發表者の色わけは、その年によって若干の違いがあるが、大體インド學三〇名前後、インド佛教六〇名前後、シナ佛教チベット佛教をあわせて四〇名前後、日本佛教七〇名前後である。研究發表は毎年『印度學佛教學研究』二冊にまとめて公刊しており、三七年度龍谷大學號は第一一巻一號二號あわせて八七六頁、三八年度日本大學號は第一二巻一號二號あわせて八五九頁の紀要を出版した。

文科系學會連合加盟學協會の動向

研究發表の内容については制限を設けないが、三七年度にははじめてシンポジウムを企畫し、「民族と宗教」「日本精神と佛教」「佛教と平和」の三部門に分けて、六人の發表者を中心に、討論研究を行なった。何分研究者が多数であるために、研究者の關心を小數のテーマに集中することはむづかしいが、しかし研究成果を結集するためには、將來研究發表について、效果的な配慮が必要であると考へている。この點については日本佛教學會の學術大會は、加盟校の代表者の研究發表であるために、發表者の人數も少く、まとまりやすいので、數年前より特定のテーマを中心にして研究發表を行なっている。昭和三四年には「業」の問題、三六年度には「倫理」の問題、三七年度には「信」の問題、三八年度には「聖德太子」の研究を共通テーマとして研究發表をなし、その成果を紀要にまとめており、すでに二九巻の『日本佛教學會年報』を發行している。三九年度には「行」の問題について發表する計畫であり、今後ともかかる企畫をつづけてゆく方針である。これによって研究者の問題意識や研究の關心を結集して、佛教學が當面している課題を解明し、それにたいする回答に、研究者の力を集中したいと考へている。

なお日本印度學佛教學會では、昭和三三年に「學會賞」が制定せられ、若い學者（四〇歳以下）に贈られるようになった。初年度には七名の學者におくられたが、その後引きつづき毎年五名内外の若い學徒におくられ、若い人々の研究のはげみになっている。

つぎに最近の研究業績について一言する。まず第一に大藏經索引の刊行が緒についた。大正大藏經八五巻の索引は、戦前に阿含部・目錄部・法華部の索隱が出版されたが、戦争のために中断されていた。戦後、日本印度學佛教學會の宮本正尊理事長が中心になり佛教系大學の學者を動員して、「大藏經學術用語研究會」を組織し、文部省の研究助成費を得て、準備をはじめた。その第一冊が三七年に出版された。『大正新修大藏經索引・第一六巻、毘曇部下』がそれである。これは大谷大學が中心になって作成した。つづいて三八年に『大藏經索引・第五巻、華嚴部』が龍谷大學の學者達によって出版された。出版所はともに大正新修大藏經刊行會である。目下引きつづき經集部・般若部・密教部等の刊行が準備中である。完成のあかつきには三〇餘巻と

文科系學會連合加盟學協會の動向

なり、大藏經の利用が専門學者にも一段と容易になり、また一般の人びとにも多方面の活用が可能になり、畫期的な利用價值が期待せられている。

索引關係としては、少しく古くなるが、水野弘元博士によって『南傳大藏經總索引』三卷が、昭和三四年より三七年にわたって刊行されて、南傳大藏經の利用を一段と容易にした。同じく三六年に長尾雅人博士によって、*"Index to the Mahāyāna-Sūtrāṅkara, Part Two"* が刊行された。三四年に發行された Part One がサンسكريットを基本にした索引であるので、これはチベット語と漢文を基本とした索引である。さらに宇井伯壽博士によって『梵漢對照菩薩地索引』(三六年)が出版され、日本佛教の方面で加藤宗厚『正法眼藏要語索引』(三七年)が公刊されている。

論文目録としては、三六年に龍谷大學圖書館『佛教關係雜誌論文分類目録』が刊行され、研究者の利用に供されている。これは昭和六年に刊行された論文目録につぐものであり、昭和六年七月より三〇年二月までの邦文雜誌所収の佛教學および眞宗學に關係ある論文を収集したものである。同じく三六年に

は花山信勝博士還暦記念會によって、花山信勝編 *"Bibliography on Buddhism, 1961"* が出版された。これは歐文の佛教研究の初期からの總目録であり、バリーより出版されている *Bibliographie Buddhique, 1930* にながめるものである。

なお以上に類するものとして、山田龍城博士の『梵語佛典の諸文獻』(昭和三四年)が刊行されている。これは佛教の經・律・論のうち、サンسكريット原典の出版されているものを詳しく調査したものであり、研究者を大いに益するものである。三七年に出版された結城令聞博士の『唯識學典籍誌』も、日本の唯識學關係の文獻を網羅的に集め、解説を付したものであり、唯識學の研究に利する點が大きい。さらに禪宗關係に、駒澤大學編『新纂禪籍目録』(三七年)がある。

辭典關係としては、『望月佛教大辭典七卷(本文五卷、索引一卷、年表一卷)』が戦後に再刊されたが、さらにその補遺が準備されていた。それが『増補』(第八卷・三三年)『補遺一』(第九卷・三八年)『補遺二』(第一〇卷・三八年)として出版された。さらに荻原雲來博士によって準備された『漢譯對照梵和大辭典』は戦前に六分冊を出して中断され

三五四

ていたが、戦後ようやく辻直四郎博士監修のもとに再刊が軌道にのり、三九年に第七分冊を刊行した。これは二〇分冊をもって完成する豫定であるという。なおフランスのレヴィ博士と高橋順次郎博士とによって計畫せられた日佛兩語の佛教辭典『法寶義林』も、戦前に三分冊(一九二九・三七)を出して中断していたが、最近續刊が企圖せられ、フランスよりジャック・メイ氏(Jacques May)が日本に派遣せられ、準備中であるという。また國際的な研究協力事業として、デンマーク學士院の「批判的バリー語辭典」が一九二四年以來出版されているが、最近日本學士院にも協力が要請せられ、辻直四郎博士を中心とする委員會が作られた。そしてKの部より原稿の作成を開始した。

さらに、さきに西藏大藏經研究會から『影印北京版西藏大藏經一五一卷(昭和三〇—三三年)』が出版されたが、さらにその續編として『宗喀巴全書』一〇卷(一五二—一六一・昭和三六年)『章嘉全書』三卷(一六二—一六四・昭和三六年)『總目錄』四卷(一六五—一六八・昭和三六年)が出版されている。

さらに大正新修大藏經百卷も、戦後に再版が企畫せられ、すでに三八卷を刊行した。ま

た國譯一切經和漢撰述部も戰前に八〇卷の計畫で出版を開始し、六六卷にいたって戰爭のために中絶していたが、戦後に計畫を擴大し、百卷の豫定で刊行を再開し、すでに八二卷を發行している。

以上は最近出版された佛教學印度學關係の基礎的な業績について一瞥したのである。このほか個々の學者の研究發表は多數にわたっている。限られた紙面に、それらのすべてを紹介することはできないから、ここには昭和三十七年以後に出版された學術書を示すにとどめる。

宇井伯壽博士は昭和三十八年七月に八一歳をもって逝去されたが、その直前に『大乘佛典の研究』一、〇〇〇餘ページの大著が出版された。先生は昭和一八年に東大を定年退官されたが、それまでに『印度哲學研究』一二卷を公刊せられ、退官後にも『佛教汎論』二卷をはじめ一四卷の大著を發表され、超人的な學問的成果を残された。大谷探検隊が中央アジアより將來した寫本類の研究が西域文化研究會の手ですすめられ、成果が公刊されているが、三十七年に『中央アジア佛教美術』（西域文化研究第五）三十八年に『歴史と美術の諸問題』（西域文化研究第六）が公刊されて、

文科系學會連合加盟學協會の動向

研究が完成した。

三十七年以降のインド學關係の業績としては、金倉圓照『インド哲學史』（三十七年）『印度中世精神史・中』（三十七年）がある。後者は同博士の『印度古代精神史』（一四年）『印度中世精神史・上』（二四年）につづくものである。續刊が期待されている。中村元博士の『インド古代史・上』（三十八年）は「中村元選集」全二〇卷の第五であり、第八の『日本宗教の近代性』（三十九年）も刊行され、すでに六卷を刊行し、完成が待たれている。なお中村元博士には『原文對譯ヴェーダーンタ・サーラ』（三十七年）がある。さらにインド學關係では佐保田鶴治『インド正統派哲學思想の始源』（三十八年）、山口惠照『サンキヤ哲學體系序說』（三十九年）、中野義照『ヴィンテルニッツ・ヴェーダの文學』（三十九年）、田中於菟彌譯『鸚鵡七〇話』（三十九年）、藤謙敬『インド教育思想史研究』（三十八年）、中村元編『自我と無我』（三十八年）などがある。

インド佛教の關係では、原始佛教に關するものとして、増谷文雄『アーガマ資料による佛傳の研究』（三十七年）、佐藤密雄『原始佛教教團の研究』（三十八年）、平川彰『原始佛教の研究』（三十九年）、早島鏡正『初期佛教と社會

生活』（三十九年）、水野弘元『バーリ佛教を中心とした佛教の心識論』（三十九年）、前田惠學『原始佛教聖典の成立史研究』（三十九年）、中村元・早島鏡正譯『ミリンダ王の問い』I・II・III（三八、三十九年）などがあり、大乘佛教に關するものとして、山口益『世親の淨土論』（三十七年）、同『大乘としての淨土』（三十八年）、上田義文『唯識思想入門』（三十九年）、田中順照『佛教における空と識』（三十八年）、安井廣濟『唯識二十論講義』（三十九年）、酒井眞典『大日經の成立に關する研究』（三十七年）、神代峻通譯『インド密教學序說』（三十七年）などが見られる。

シナ佛教では伊藤猷典『碧巖集定本』（三十八年）の大著が公刊され、鈴木大拙・秋月龍珉『趙州禪師語錄』（三十八年）、石井教道『華嚴教學成立史』（三十九年）、關口眞大『禪宗思想史』（三十九年）、長部和雄『一行禪師の研究』などが見られるが、比較的業績が少ない。

日本佛教關係では、各宗門において種々の著作が出版されており、ひとつひとつ調べることは容易でない。ここには氣のついたものを挙げるにとどめる。古田紹欽『日本佛教思想史の諸問題』（三十九年）、二葉憲香『古代佛教思想史研究』（三十七年）、石田瑞麿『日本佛

教における戒律の研究』(三八年)、楠田良洪『眞言密教成立過程の研究』(三九年)、福井康順編『慈覺大師研究』(三九年)、小野勝年『入唐求法巡禮行記の研究、第一卷』(三八年)、重松明久『日本淨土教成立過程の研究』(三八年)、『法然上人傳の成立史的研究、三卷』(三六七年)、二葉憲香『親鸞の研究』(三七年)、笠原一男『一向一揆の研究』(三七年)、大久保道舟『曹洞宗古文書、上・下』(三六七年)、鏡島元隆『道元禪師とその門流』(三七年)、茂田井教享『觀心本尊鈔研究序說』(三八年)などがある。

なおこのほかに學者の還暦古稀等の記念論文集も見られるが、最近のものとしては、『岩井博士古稀記念典籍論集』(三八年)、『結城教授頌壽記念佛教思想史論集』(三九年)、『干潟博士古稀記念論文集』(三九年)などがあり、多數の學者の論考をのせている。

平川彰

II 昭和四十年年度报告

——サンスクリット研究の動向——

一九五一年、時の東京大學教授宮本正尊博士を理事長として、日本印度學佛教學會が發足し、斯學初の全國學會として既に十有餘年

の星宿を閱した。この間、宮本理事長の賢明なる統率の下に、本學會は各大學研究者間の連絡・情報交換、少壯學者の切磋琢磨、あるいは協同研究等、本邦斯學の發展に多大な貢獻をなした。ここに過去二〇年の斯學の發展を、専ら梵語梵文學の領域に限って概觀するが、もと梵語梵文學は西歐に輝かしい研究を數え、これに二〇〇年の研究史を擁し、本邦に在っても西歐的傳統・訓練を抜きにして學的業績を挙げ得ぬ事情がある爲め、主要網目の下にまず戦後の西歐・印度の學界を概觀し、しかる後に本邦學者の研究を紹介するのが解説の順序と思われる。

(I) ヴェーダ學

内容の難解と、膨大な研究史を擁する Rig Veda に在つては、一九五一年待望の K. F. Geldner の全ドイツ語譯が刊行せられた。日進月歩の研究はこれが修正批判に向つたのは當然の勢であるが、Geldner の業績は正しく Rig Veda 研究に一時期を畫した。一九一〇年以來、その研究主題を構成していた H. Lüders: Varuna は一九五一、一九五九年にそれぞれ、I、II の出版をみ、Varuna 年の神觀史的位づけと、それをとりまく主要概念、水・天空・海洋・河川・Soma・Ria

等を、豊富な文獻に基づいて論じ、文獻による文化史研究の範を垂れた。フランスに在つては L. Renou が Etudes védiques et païniennes の名の下に一九五五年以來神格を中心として逐次 Rig Veda の佛譯を發表し、詳細な註に研究史を網羅して往年の H. Oldenberg: Rig Veda, Textkritische und Exegetische Noten (1909-1912) に勝ることも劣らぬ業績を残し、更にインドラ讃歌に肉薄せんとしている。インヤに在つては S. S. Bhawe が三卷に Soma 讃歌を英譯研究 (1957-1962) し、第七卷は H. D. Velankar (1963) によつて英譯された。語彙・文法・文體論に亘つては、その研究史二〇年を網羅する事は不可能に近う。R. N. Dandekar と L. Renou: Bibliographie védique (1931) の繼承を以つて自ら任じ、その Vedic Bibliography は一九六〇年迄の諸研究を二冊にまとめた。今ここに主要な研究者を挙げれば、オランダの J. Gonda は語彙・文法その他多くの領域に精力的な努力を傾け、膨大な書卷を次々に發表した。その各個研究は同氏の近著 Die Religionen Indiens I (1960) に多くまとめられ、もつてその傾向を窺い得るが、やや未開人的思惟を Veda 語

に適用しすぎた嫌いがある。E. Sieg, H. Lüders の薫陶を受け今 Tübingen に講筵を張る P. Thieme は一九五七年 Mitra and Ar-
yaman を公けにして Āditya 三神に獨特の解釋を發表した。他の多數の論稿に窺ひ知る如く、嚴密な文獻操作は Veda 文獻學の範たり。K. Hoffmann と共にマインツ Veda 學の最高峰に位している。斯く Renou, Gonda, Thieme が歐州三國に在りて、それぞれ立場から Veda の Galimatia に挑む様は蓋し現代 Veda 學の壓巻と稱し得る。なほ Rig Veda 研究に必須の Grassmann の Wörterbuch zum Rig Veda, また簡便な Th. Aufrecht の Rig Veda ローマ字版は共に一九五五年版を新たにこたへた。

Atharvaveda も歐州ウィーン學者の興味を惹き、卓れた研究を數え得るが、D. Bhat-tacarya によつて Paippalada Atharvaveda の出版 (1963) は今後この方面に研究の分野を拓くものと思われる。

龐大な Brāhmaṇa, Sūtra 文獻には Text の出版翻譯に輝かしい成果が現われた。その量 Śatapatha Brāhmaṇa に次ぐ Jaiminiya Brāhmaṇa は一九五四年 Raghu Vira, L. Chandra の手にその完本が出版され、W.

Caland の遺稿 Śaṅkhāyana Śrauta Sūtra も一九五三年出版された。一九五八年以來 C. G. Kashikar は Śrautakośa の出版を手がけ、Śrauta 祭を祭式毎に一所にまとめて配列し、またその英文部 (R. N. Dandekar) は Baudhāyana Śrauta Sūtra の全譯を目指している。Mahāva Śrauta Sūtra には一九六三年 J. M. van Gelder の翻譯が著され、J. C. Heesterman は Yajur Veda 系の Text に基づいて Rājāsūya の研究を發表し (The Ancient Indian Royal Consecration 1957)、J. Brough は Gotrapra-varamaṇjali を英譯して Brāhmaṇa 研究に貢獻し (Early Brāhmaṇical System of Gotra and Pravara 1953)、W. Rau は Brāhmaṇa 文獻に基づいて好著 Staat und Gesellschaft im alten Indien (1957) を著した。なほ祭式用語は L. Renou が著する Vocabulaire du rituel védique (1954) に解説するところがあった。A. Weber の手に成った Śatapatha Brāhmaṇa の Text は一九六四年インドより再版されたが、A. Minard は不撓不屈の努力を拂って Trois énigmes sur les cent chemins (1949, 1956) を著わし、原典批判に卓れた業績を残した。

Taittirīya Brāhmaṇa は P. E. Dumont が逐次その英譯を試みている (1957-1963)。Upaniṣad にもつて L. Renou 主幹の、一連の佛譯が刊行された (1943-1956) 他、J. Varanne は Mahānārāyaṇa (1960), J. A. B. van Buitenen は Maitrāyaṇi (1962) の批判的研究を著わした。

土着文法學の領域では、L. Renou が佛譯と解説を付して La grammaire de Pāṇini (1948-1954) を著わし、文法用語を著する Terminologie grammaticale du sanskrit (1957) といった他、本邦の大地原豊と協力して Kāśikāvṛtti の佛譯を進めている。この他 R. Birwé は大冊 Gaṇapaṭha の研究を發表し (1961)、言語哲學では H. Scharfe, K. Rajā, G. Sasuri, D. S. Ruegg, M. Biardeau 等が貢獻した。

Ⅱ) Arhaśāstra, Smṛti, Epic, Purāṇa 戦前、B. Breloer, J. J. Meyer 等の卓れた學者の研究對象となつた Kautilya Arhaśāstra は暫く學者の興味を惹く事もなく、研究はやや停滞氣味であつたが、一九六〇年、R. P. Kangle が原典の批判的出版をなして、一九六三年それに基づいて英譯を出版した。第三卷は研究篇となつて間もなく刊行を豫想され

るが、この Kangle の三部作は Arthaśāstra 研究に一時期を畫するものと期待される。

しかしこの流れを汲む Nitisāstra なんかすく Cāṇakya Niti の研究は、戦後 L. Sternbach ただ一人の手によつて長足の進歩を遂げた。戦前 O. Kressler を始めとし散發的に隨時研究せられた Cāṇakya 金言集は、彼の手煩瑣なまでに周到綿密な方法を以て批判的に扱われ、Mahābhārata, Manu 等と比較され、その系統が精確に辿られた。

法典文學に在つて特筆すべきは P. V. Kane の History of Dharmasāstra の完結である。一九三〇年その第一巻を公けに、Chronology を論じて以來、實に三〇餘年を経つ、一九六二年その第五卷第一部、全七冊が完結した。本書はひとり法典文學のみならず、インド文化の全般に亘るものとして、廣義の Hinduism の百科全書となり、詳細な Index・周到な注記と相俟つて、類書を壓し、研究者に多大の便宜を供する。

二大敘事詩 Mahābhārata と Rāmāyaṇa にあつてみるに、一九三三年 V. S. Sukthankar にあつて着手せられた Mahābhārata のふたつ Pūna Critical Edition は、今已 Annāsana Parvan と Śānti Parvan の

序文を残すのみとなり、ほとんど完結したといつて宜い。今これを主幹する P. L. Vaidya は、大乘佛典・Rāmāyaṇa の Text を出版する傍ら Bhandarkar Oriental Research Institute に在つて Harivaṃśa の批判的出版に着手した。Rāmāyaṇa にあつては、G. H. Bhatt の着手したうめ、Baroda Critical Edition は一九六〇年第一巻の刊行を見、現在第四巻まで出版あつてゐる。Bhatt 亡き後、D. R. Manjadh, G. C. Jhalia 等これを繼續し、およそ一九六七年度には全七巻の刊行が終ると豫定あつてゐる。

一九四四年 V. S. Sukthankar Memorial Edition vol. I, Critical Studies in the Mahābhārata が刊行され、原典批判その他に卓れた業績をみせたが、往年の巨匠 H. Oldenberg, H. Jacob, E. W. Hopkins の業績を思う時、戦後はこれに匹敵する研究の出ない憾みがある。この間に在つて R. Shaffer: Ethnography of Ancient India (1954) は Mahābhārata 中の部族名を整理し、卓れた業績を残し、W. Ruben は Kṛiṣṇa 傳説を扱つて Harivaṃśa, Purāṇa の系統を論じた。R. K. Sharma: Elements of Poetry in the Mahābhārata (1964) は前三巻に

みえる修辭學を論じ、また H. von Glase-napp は Yogavāsīṣṭha Rāmāyaṇa, Adhyātma Rāmāyaṇa を文獻學的・思想的に論じ、Zwei Philosophische Rāmāyaṇa (1951) を發表した。なお Bhagavadgītā には F. Edgerton の極度に良心的な英譯 (1952) が出版され、Gīta の Rāmānuja 註は J. A. B. van Buitenen の研究するところとなつた。

龐大な Purāṇa 文獻は Hinduism 研究の寶庫といわれながら、その量の龐大と内容の無味乾燥の故に、F. E. Pargiter, W. Kirfel の大著以後、さほど研究者の關心を惹かなかつた。しかし今 Calcutta Sanskrit College に講筵を張る R. C. Hazra は一九四〇年 Purāṇic Records of Hindu Rites and Customs を著わつて、極めて獨特な立場から Purāṇa 文獻を扱つた。ちやうど Studies in the Upanurāṇa I (1956), II (1963) を發表し、今や斯學の最高峯に君臨する。W. Kirfel も原典批判の立場から、ちやうど主として Purāṇa 文獻の世界觀の諸問題を取りあげ、Kirfel の後を襲つた P. Hacker は Prahlāda 傳説を扱つて Prahlāda, Werden und Wandlungen einer Ide-algestalt I 冊 (1959) をあつて、ānvikṣiki,

śraddhā, avatāra 等インド宗教の主要概念を、卓越せる分析方法を以て解明した。同門の H. Lasch また Purāṇa 文獻中にみえる王法 Rājadharmā (1959) を公けにし、年を同じつゝニルンヌの A. Daniélou は Textes des Purāṇas sur la théorie musicale, Vol. 1 を發表した。

ヤンセンに在つては V. R. Ramachandra Dikshitar の Purāṇa Index 三卷 (1951-1955) を公けにしたが、Bhāgavata, Vāyu, Viṣṇu 等少数 Purāṇa に資料を限つたため、より完全な Index の公刊が望まれる。この他 B. Sureshchandra の Le culte des ancêtres (1940), D. R. Patil の Cultural History from Vāyu Purāṇa (1946) を著し、文化史的諸問題を扱つた。ヤンセンに在つては V. S. Agrawala が雑誌 Purāṇa を主幹として一九五七年以來發刊し、自ら Matsya Purāṇa・Varāha Purāṇa の研究を發表し、Purāṇa 研究も次第に活氣を呈する兆をみせつつある。尚、往年の H. H. Wilson の Viṣṇu Purāṇa の英譯は一冊にまとめられ、R. C. Hazra の序文を添へて一九六一年三版された。

(三) Hinduism

文科系學會連合加盟學協會の動向

Hinduism の研究は多数の論稿によつてこれを窺ひ知る事が出来るが、Vedism ないしは Brahmanism との對照に於いてこれを把握せんとする傾向が、なかなかインドに在つて顯著である。これら諸論稿は、インドス文明が明るみに出で以來、古くインド半島には、インド・フリヤンの侵入以前より高度の文明を有した土着文化が榮え、インド・フリヤンの優越によつて一時後退を餘儀なくされたものが、漸次復活擡頭して Hinduism に流入したとなす假説に悉く基つてゐるといふて宜い。この種の考え方はもとより戦前より存在し、M. Monier Williams: Brahmanism and Hinduism (1891) を始めるとして E. Arjuman 氏の著 Rudra. Untersuchungen zum altindischen Glauben und Kultus (1922) に至るに Rudra をヒータ以前の神となし、J. J. Hauer の Vratya, Yogapraxis 等一連の論稿ともなつた。しかし戦後、インドを始めとして、造形美術の始源・信仰形態・Yoga・Āstama・苦行等、極めてインド的と考えられる諸概念を努めてヒータ以前に遡らせんとする傾向が顯著にこれに連關してインドス文明とウェーダ文化の關係が様々に論議される。

この間に在つて J. Gonda: Aspects of Early Viṣṇuism (1954) はウェーダ諸文獻に足場を置きて、ヤンセンの神の性格、Avatāra, Sri 等を論じ、文獻學的に初期ヤンセン教を概觀した。またその Die Religionen Indiens II. Der jüngerere Hinduismus (1963) は、往年の J. N. Farquhar: An Outline of the Religious Literature of India (1920) を up to date なものと好著といふ。ヤンセン教の一派、Pāncārātra 派に在つては、戦前の Ahirbudhnya Samhita (1916), Jayakhyā Samhita (1931) の出版に次ぎ、Lakṣmītantra は一九五九年校訂出版された。

ヤンセン教に在つては、ニルンヌの L. Silburn が夙にカシヤミーンのヤンセン教研究に着手し、Paramārthasāra (1957), Vātanāthasūtra (1959), Vijnāna Bhairava (1961), Śivacintāmaṇi (1964) を佛譯し、今 Utpaladeva の Śivastotravali の佛譯を用意しつつある。同女史 E. L. A. Padoux: Recherches sur la symbolique et l'énergie de la parole dans certains textes tantriques (1965) もこの流れに倣ふものといふ。ヤンセンに在つては K. C. Pandey が

一九三五年以来 Abhinavagupta の研究に従事し、更に比較美學・美意識論 (Comparative Aesthetics, 1950) に進み、イタリアの R. Gnoli はまた The Aesthetic Experience according to Abhinavagupta (1956) を著わった。戦後 Pondichéry に基礎を固めた Institut Français d'Indologie の J. Filiozat 主幹の下に、シヴァン教 Agama の出版に着手し、既に可成りの原典出版をみた。Raghu Vira, L. Chandra の Śatapitaka Series と A. Ziesniss, S. Devi 等の手に成るシヴァン教研究が収録されつゝゐる。またカンボジャに傳播したシヴァン教には K. Bhattacharya: Les religions brahmaniques dans l'ancien Cambodge d'après l'épigraphie et l'iconographie (1961) の卓れた業績がある。

古く A. Avalon の逐次刊行したタントラ文獻も、戦後次第に本格的研究の対象となり Saundaryalahari は一九五八年 W. Norman Brown の手に出版翻譯され、また佛教タナハ Hevaira Tantra は一九五九年 D. L. Snellgrove の手に研究出版された。S. B. Dasgupta (Obscure Religious Cult, repr. 1962; Introduction to Tantric Buddhism,

1950) C. Chakravarti (The Tantras, Studies in their Religion and Literature, 1963) 等もこの方面に概説書・研究書をものじ、タントラ文獻の正しい評價と、研究方法的の實際を示した。タントラ研究は、戦後開發され、研究が盛となった分野と云うことができる。

なお非正統の宗教として、古代インドの Ājivika 教は、A. L. Basham が佛典ジャナナ教典・タミール文獻に基づいて、その復元に成功するところとなり (History and Doctrines of the Ājivikas, 1951)、この分野に貴重な貢獻をなした。

今から約五〇年前、R. G. Bhandarkar の Vaiṣṇavism, Śaivism and Minor Religious Systems (1913) を出版して、Hinduism の大綱を始めて學界に提示したが、戦後を含むこの半世紀の間に、研究は著しく進歩し、顧て今昔の感を禁じ得ぬものがある。

四 言語研究

言語研究に在つては、一八九六年 J. Wackernagel の手がけた Altindische Grammatik は A. Debrunner の繼承するところとなり、一九五四年その III の Nominalsuffixe の刊行など、A. Debrunner は、

I' (Einleitung zur Wortlehre, Nominalkomposition), II (Nominalflexion, Lahlwort, Pronomen) の Nachträge をものじ (1957), L. Renou は Introduction générale を擔當して、龐大な研究史を網羅し、文字通り Wackernagel の大著を up to date のものとした。Wackernagel, Debrunner の二巨匠の亡き後、その第四卷 Verbum und Adverbium は K. Hoffmann の手に委ねられるが、最近その門下 J. Narten: Die sigmatischen Aoriste im Veda (1964) の成果は、その完成のものが容易ならぬことを仄かす如くにさえ思われる。

その他、文法書として L. Renou: La grammaire de la langue védique (1952) に次ぐ T. Burrow は獨特の立場から The Sanskrit Language (1955) を發表して、多大の反響を呼んだが、その透徹せる分析力は彼の諸論稿にこれを窺うことができる。Burrow と同じく、印歐語比較文法の立場より、穩健に梵語文法を扱い、文獻・研究史を網羅して、研究者に多大な便宜を供したものが、往年の A. Thumb の Handbuch des Sanskrit を改訂して二冊とせよと R. Haudschild の出版 (1958, 1959) など、Hau-

schild は最近 Wackernagel-Debrunner の Index を世に贈り、今後共この方面の研究者より讃辭と感謝をうくるものと確信する。

語源辭書には M. Mayrhofer: Kurzgefaßtes Etymologisches Wörterbuch des Altindischen が一九五三年以來刊行され、一九六四年までに一八分冊が公刊された。インド・フリヤン諸語の立場よりまとめた R. L. Turner: A Comparative Dictionary of the Indo-Aryan Languages は一九六二年以來刊行され、一九六五年迄にその第六分冊がでている。その他待望久しい Deccan College の梵英大辭典は未だ發足の兆しをみせないが、その副産物 Vak 五卷は貴重な論文を載せている。

バーリ語に在つては、一九五一年、印歐語比較文法の立場より、始めて M. Mayrhofer が Handbuch des Pali を世に贈り、中期インダ・フリヤン語一般にも言及したが、H. Hendriksen は Syntax of the Infinitive Verb-forms of Pali (1944) を著わつて、部分的ながら、始めてバーリ語の構文論を本格的に扱った。記述文法としては A. K. Warader の Introduction to Pali (1963) がある。しかし戦後最大のバーリ研究は V. Tren-

ckner によつて始められた A Critical Pali Dictionary の、國際的協力の下に於ける繼續の企畫というべく、梵語にあつて今なお一〇〇年の生命を維持する O. Böhtlingk-Roth の大辭典に匹敵する。このバーリ語辭典は、Trenckner の slip を基に、向う二五年間に、全八卷の完成を目指して發足した。本邦から前田惠學氏が参加しているが、第二卷の第一分冊は一九六〇年、第二分冊は一九六二年それぞれ發刊された。同時に中期インド・フリヤン語の研究の進歩は、他面バーリ語を、ただ單に原始佛教聖典の言語としただけではなく、より廣い背景より取扱わんとする機運を萌し、原始佛教研究のそれと軌を一にしている如くに思われる。

戦前 J. Prinsep, E. Hultsch 等卓れた學者の手に成つた Asoka 王碑文は、一九五〇年 J. Bloch が簡便な Les Inscriptions d'Asoka を出版して以後、一九五八年フランス學者によつて Kandahar 碑文の研究に活氣を呈した。Asoka 王碑文はインド碑文研究の分野に在つて尙ひとり泰西學者の關心を惹きつけ、現在でも L. Alsdorf, K. L. Jantzen の専門的研究を数えている。因みに戦前 J. Prinsep, A. Cunningham, J. F. Fle-

et, G. Bühler, F. Kielhorn 等卓れた歐州學者の親しく手にした印度 Epigraphik の傳統は戦後途絶えた觀があり、専らインド人學者の手に委ねられた恰好となつて、一九六一年 H. Lüders の Mathura Inscriptions はむしろ唯一の例外となつた。

戦前 An Outline Syntax of Buddhist Sanskrit (1928) を著わした S. Sen は一九六〇年 A Comparative Grammar of Middle Indo-Aryan を著わつた。またフラーツリット研究に M. A. Mehendale: Historical Grammar of Inscriptional Prakrits (1948), G. V. Tagare: Historical Grammar of Apabhramśa (1948), G. V. Davane: Nominal Composition in Middle Indo-Aryan 等卓れた諸研究がある。この方面における戦後最大の出版は F. Edgerton: Buddhist Hybrid Grammar and Dictionary (1953) に指を屈する。もとフラーツリット語の一つとして、初期大乘佛典の言語となり、文法・語形・語彙に亘つて、正規の梵語より注目すべき逸脱を示していた所謂佛教混淆梵語は、Edgerton のこれら不規則形を蒐集整理して、これに體系を與えんとした努力により、ほぼ一段落ついたといつて宜し。この文法と辭書とは、

正規の梵語を豫想し、その上に立つての成果であるから、辭書はさながら Böhtlingk-Roth 大辭典の Nachträge となり、正規の梵語以外の意味に用いられる語とその意味とを列擧した。従つてあくまで Böhtlingk-Roth を豫想して意義あるものと見做すべきで、これのみ切り離して佛教語辭典として扱い、その缺陷をつくる事は當を得ない。蓋し佛教混淆梵語はあくまで正規の梵語に修熟した學者が、奇異の驚きを以てその研究對象となした因縁を有する故である。一九六二年 J. Brough は難解な寫本を讀解して Gandhari Dharmapada を公けにし、西北インドの Gandhari 語の文法を詳細に論じ、法句經のみならず、インド・フリヤン語に卓れた業績を残した。この他一九〇〇年 R. Pischel の著わした Grammatik der Prakrit Sprachen は S. Jha により英譯され (1957)、D. T. Sheth: Päta Sadda Mahanava 等 Prakrit Text Society Series 第七卷より Calcutta より再版され、フラークリット研究に便宜を供するに到った。

今一戰後の重要な言語研究として非アリヤン語の研究がある。梵語研究に比して著しく研究の遅れていたこれら非アリヤン諸語の

中、ドラヴィダ語は J. Bloch, P. Meile 等卓れた學者の手がけたところであつたが、一九六一年に到つて T. Burrow, M. B. Emeneau: A Dravidian Etymological Dictionary が出版された。兩博士門下には、批判的精神を體得した少壮インド人學者が集つ、今後この方面に長足の進歩が期待される。

なお L. Renou: Histoire de la langue sanskrita は、言語史的興味を喚ぶものゝ、梵語の諸様相を、年代的配慮を容れつつ、文獻の genre に基づいてそれぞれの特徴を論じた卓れた概説書となり、一九五六年刊行された。

(五) 梵文學・美術史・その他

狹義の梵文學の領域では、出版・翻譯・研究等教學に違がないが、今は主要なもののみ挙げるに留める。ペンキヤーの A. Shapra は Kalidasa Lexicon の出版に着手し (1954)、New Delhi の Sāhitya Akademy は S. K. De, H. D. Velankar, V. Raghavan 等現在インドに望み得る最高の staff を揃へて Kalidasa の Text 出版を續けつゝ、戦前 F. Edgerton のなつた Pañcatantra の Text 復元に續きつゝ D. D. Kosambi は Bhartrhari 百頌の批判的出版をなす (1948) と

の極限を示した。Alamkāra に多數の研究をなす Catalogus Catalogorum の作製に専念する V. Raghavan は二〇餘年の成果 Bhoja's Śringāra Prakāśa の英譯を發表した (1963)。その他 Nāṭyaśāstra は M. Ghosh の英譯するところとなり、既に二冊の刊行をみた。なお Subhāṣitaratnaśoṣa の Text は D. D. Kosambi, V. V. Gokhale による (1957)、また英譯は D. H. H. Ingalls の麗筆の下に出版された (1965)。戦前 A. B. Keith, A. A. Macdonell 等の著わした概説書の類としては、戦後はわづか S. N. Dasgupta, S. K. De: A History of Sanskrit Literature, Vol. 1 を数えるのみである。

美術史の領域に在つては、戦前 V. Smith, A. Foucher, G. Rao, J. Marschall 等の巨匠を輩出したが、戦後 J. N. Banerjee: Development of Hindu Iconography の改訂版 (1956) が出づ、圖像學を中心とす Hinduism 全般に卓れた概説書となつた。B. Rowland: The Art and Architecture of India (1953), M. T. Mallman: Introduction à l'étude d' Avalokiteśvara (1948) は比較の視野を容れ、B. Bhattacharyya: The In-

dian Buddhist Iconography (1958) も記述的に卓れた研究となつた。その他 J. Ambler: Le trône (1949), O. Vinnot: Le culc de l'arbre (1954) も美術史の立場よりそれぞれの問題を論じ、A. Boner の Principles of Composition in Hindu Sculpture (1962) を著わしたが、梵文原典に基づき、碑文・考古學に多大の貢獻をなした。戦前 Indian Serpent-lore を著わつたその學殖を謳われた J. Ph. Vogel の遺稿 Goose in Indian Literature and Arts は一九六二年出版され、小冊子ながら、原典に基づく古代美術史研究の範となっている。

古典インド研究の全般に亘る概説書として古く Ch. Lassen: Indische Altertums-kunde 四卷 (1844-1862) があつたが、學問の進歩は同一人をしてインド學の全般に通づる事をほとんど不可能ならしめた。しかし他面卓れた學者の協力により、卓れた概説書を得たのも事實である。この中、L. Renou, J. Filiozat の主幹する L'Inde classique 既刊二卷 (1947, 1953) はこの方面の精確かつ内容豊富な集成として現在における望み得る最高水準を示している。インドに在っては歴

文科系學會連合加盟學協會の動向

史家が中心となつた R. C. Majumdar, A. D. Pusalker: The History and Culture of Indian People は一九五一年以來既に八卷の公刊をみた。戦前三卷にまとめられていた The Cultural Heritage of India (1937) は一九五六—一九六二年の間に四冊に改訂増補された。また A. L. Basham: The Wonder that was India, A Survey of the Culture of the Indian Sub-continent before the Coming of the Muslims (1954) は、公平に文化の全概を概説し、インド文化史の教科書として高評を博している。

(六) 本邦學者の研究

以上過去凡そ二〇年間の泰西・インドにおける古典インド研究を大雑把に概観したが、翻つて本邦のそれを顧る時、新學の傳統の浅い事と研究者の寡少の故に、寥々たる感を禁じ得ぬものがある。それは、もと本邦のインド研究が佛教研究の一環として發達し來つた特殊事情にも由來するが、日本印度學佛教學會の會員の中純粹にインド研究に従事している者はわづかにその二〇程度に留まる。佛教學が世界の學界をリードしているのをみる時、關係者は寂寥の感なしとしないが、印歐語の有力な一員として過去二〇〇年に亘り泰西の

言語學者の研究對象となつた梵語梵文學が西歐的傳統・訓練なしに學的成果を擧げ得ない客觀狀態を思えば、けだし當然の勢とも思われる。しかし、かかる不利な狀況の下に在つて、少數ながら卓れた研究者を輩出した事實は、他の東洋諸國のインド研究に冠絶し、蓋し我々の誇りとするところである。以下に本邦の梵語梵文學に於ける卓れた業績を紹介して本稿のしめくりとするであらう。

戦時中、南方民俗叢書の一環として、辻直四郎主幹の下、田中於菟彌、坂井尙夫、中村元の執筆した「印度」(1943) は社會・哲學・神話・傳説・言語・文學を網羅し、その頃迄の研究史を顧慮して、客觀的・穩健な立場からインド文化の全般を概説し、未だにインド研究者の最良の手引きたる價值を失わない。

泰西のインド學の傳統を始めて本邦に導入移植した辻直四郎は、ヴェーダ學に一家をなし、供獸祭を例にとつて、散逸したカタ派の Sūtra の内容復元を試み、國際的な貢獻(プラーフマナとシュラウタストラとの關係、一九五二年)をなす傍ら、ヴェーダ、ウパニシャッド、ギーター、シャクンタラーを翻譯研究して、古典インド文化の精華をわが國に

紹介した。

戦前「印度古代精神史」(1939)を著わした金倉圓照は、戦後「印度中世精神史」上(1946)、中(1962)を公刊し、周到綿密に研究史を紹介し、精神史・文化史の中心點を精確に提示して、研究者に多大の便宜を與え、學界に裨益するところ大なるものがあつた。

初期ヴェーダーンタ哲學史四卷を公刊してインド哲學研究に卓れた貢獻をなした中村元は自ら比較哲學の陣頭に立ち、内に在つては難解な印度哲學・佛教學を西洋哲學研究者に開放し、外に在つては本邦の佛教學の業績を紹介したが、「インド古代史」上(1963)、「東西文化の交流」(1965)を發表して廣くインド文化・思想史研究に裨益し、内外に卓れた研究者を養成した。

Avadana 文獻を專攻する岩本裕は、その Hauptwerk の傍ら、一九五四年以來「カタールサリットサーガラ」の邦譯を出版し、梵文戯曲「土の小車」(1959)を邦譯し、梵語文法(1956, 1965)を著わし、「インド説話」(1963)を論じ、精力的に梵文學の紹介に貢獻した。佛教をより文化史的な立場から論じたのも、岩本裕を以つて嚆矢とする。

同じく梵文學の分野に在つて敘事詩・抒情

詩を逐次邦譯した田中於菟彌は一九六三年「鸚鵡七十話」を Textus orator より邦譯し、極めて良心的・學問的にこの Text を論じた。傍らインド説話の流傳の徑路を迫り、原典に基づいて文獻學的に操作をし、比較文學研究に一家をなしてゐる。

夙に Madanashrivana (1955), Kalevala-kutuhala (1960) の批判的出版を公けにして、内外よりその語學力を謳われた大地原豊は、L. Renou と協力して Kāśīkavyti の佛譯を逐次(1960, 1962-)發表し、インド土着文法學に一家をなし、國際的に極めて高く評價される。その誠實な學的態度と天才的理解力とは、本邦中堅學者の誇りであり、若き研究者の指針である。同門に Pramāṇasamuccaya の卓れた研究を遂行する服部正明、Prājñāpradīpa を逐次獨譯して、インド佛教研究に専念する梶山雄一を擁し、門下の小林信彦はインド古典修辭學に、上岡弘二はイラン語研究に、また内田紀彦はドラヴィダ研究に進んで、その學問領域の廣汎なるを窺わしむるに足る。

近代インド語を完全に修得し、本邦ヒンディー語研究の創始者となつた土井久彌は一九五九年「牛供養」を邦譯し、「ヒンディー語

文法讀本」を著わして、近代インド語研究の先驅者となる。また我妻和男、青柳精三は「ベンガル語文法概説」を紹介し(1964)、渡邊照宏はベンガル語原典より始めてタゴールを邦譯(1962)して、斯學の本格的研究に端緒を開いた。

美術史、なかならず佛教美術の領域に在つては、高田修が獨り梵語を驅使し、獨創的研究をなすが、一九六五年上野照夫と協同して、大冊「インドの美術」をものした。

原 實